

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	滝 正登
論文担当者	主 査 池内 浩基
	副 査 富田 尚裕
	副 査 篠原 尚
学位論文名	Analysis of risk factors for colonic diverticular bleeding and recurrence (大腸憩室出血の発症と再発の危険因子)
論文審査の結果の要旨	
<p>大腸憩室出血は高齢化と抗血栓薬の普及により増加傾向にあり、再発率も 30%と高率であるが、大腸憩室出血の危険因子や予防法は確立されていない。そのため、大腸憩室出血の発症と再発の危険因子を明らかにすることを目的としている。</p> <p>対象は、兵庫医科大学病院で入院加療を行った大腸憩室出血群 100 例と、同時期に他の目的で下部消化管内視鏡検査を行った際に偶発的に大腸憩室症と診断された非出血群 200 例で、性別と年齢を合わせた症例対照研究を行っている。憩室部位、併存疾患、内服薬を検討項目としている。更に再発に関しては、出血群の初回出血例 71 例で追跡期間中に再出血を認めた、再出血群 15 例と、非再出血群 56 例で比較検討している。</p> <p>結果は、1) 出血群は男性 62 例、女性 38 例、平均年齢は 70.7±11.6 歳であり。両側型憩室症 (Odds ratio 3.00, P<0.001)、非選択的 NSAIDs (3.47, P=0.011)、低用量アスピリン (2.23, P=0.024)、抗凝固薬 (3.09, P=0.008) が出血の危険因子であった。選択的 COX2 阻害薬に関しては 2 群間で差を認めなかった。2) 再出血群は男性 8 例、女性 7 例、平均年齢は 71.6±11.0 歳で、1 年以内の再発率は 15%であった。過去に大腸憩室出血歴を有す 24 例は、初回出血 71 例と比し再発率は有意に高く、またステロイドが再発の危険因子であった。</p> <p>以上より申請者は、大腸憩室出血発症の危険因子は、両側型憩室症、非選択的 NSAIDs、低用量アスピリン、抗凝固薬であり、予防法としては、NSAIDs 休薬が困難な症例では選択的 COX2 阻害薬への変更が出血リスクを低減する可能性が考えられる、と考察している。</p> <p>本研究は今後増加が予想される大腸憩室出血症例の、診療指針に重要な知見を与える臨床研究であり、学位論文に十分値するものと評価した。</p>	